

# Prov. voler の 未 来

岸 本 通 夫

はじめに

ロマン学会をつらうという準備段階での幾度かの集まりの間で、どの折であったか、語学上の疑問があれば、疑問のままの形で発表し合ってはどうかという話が出たことがあった。筆者はこの提案に心から賛成した。例えば仏語学の枠の中では解き切れない問題が、イタリア語学者またはスペイン語学者に伝えられ、イタリア語学かスペイン語学の照明を受けることによって造作なく解決することもある。解決とまでは行かなくとも、他方言の領域から、解決の糸口となるような情報が得られることもある。あるいは、イタリア語またはスペイン語においても同じ問題があるという報告があった場合には、これは共同研究のよきテーマたり得るであろう。正しくそのような点にこそ、ロマン学会および学会誌の存在意義と機能とがあるべきであろう。

そこで、そのような意味で、取りあえず一つの未熟な疑問を提出させて頂き、ロマン語の他の方言に何か analogique な現象がないかどうかをお質ねすることにする。

0. 疑問は、フランス中世史叢書の一巻 *La Chanson de la Croisade albigeoise* を学生たちと読んでいて出て来たものである。この書物は、御承知のように、fr. mod. との対訳になっていて、左頁には原作の prov 語韻文が、右頁には対照して、その fr. 語散文訳がかかげられている。ただし、校訂者兼翻訳者である Eug. Martin-Chabot という人は、語学畑では聞き馴れない名前のように、脚註は、おおむね歴史的な考証に詳しく、巻末の索引も固有名詞すなわち登場人物の名を主として編まれている。そして何よりも、翻訳そのものが大意を伝えていることを目的としたもののように、かなり融通のきく意訳が与えられており、決して語学上の問題に意を用い、心を配ってなされた翻訳でないことが確かなようである。

1.1 従って、fr. 語訳 にあまりこだわることはないのだが、*voler* (:fr. *vouloir*) の未来形に一目やや驚くべき訳語がしばしば与えられている事実があり、また文脈から考えても、例えば fr. *vouloir* などの用法と比べて、納得の行かないような状況において用いられているのである。

ともあれ、214 *laisses* にわたる長大なこの叙事詩の初めの 50 *laisses* ほどの間から、まず実例を挙げてみる。

i) *Per l'arse vesque d'Aux.../Trames ...*

*Qu'el ira al mesatge, nos'en voldra estraire,* X 6-8.

ii) *Del Borc Sant Antoni, ...*

*A lost de Cassanolh s'en voltra el aler,* XV 12-13

iii) *Que'l barnatges de Fransa s'en voldra revestir,* XX 20.

- IV) *L'aiga vos voldran tolre* ..... XXIV 9.  
 V) *Lo vescoms si dotzes d'aicels que il voldra  
 Ne laicharan ichir* ..... XXX 15-16.  
 VI) *Aisel voldran pregar trastois* ..... XXXV 10.  
 VII) ... *si's voldran acorder* XXXX 3.  
 VIII) ... *faran tant com voldra jutger / L'apostolis* ... XXXIX 5-6  
 IX) *E dizo* ..... *que i voldran aler*. XXXIX 5-6  
 X) *Per la gran via longa, que cu9 que voldra far* XL2.

12 以上の各例につき検討してみる。

i) “Auchの大司教に向けて使いを出した。この人ならば(教皇庁への)使節に立ってくれるであろう。この役割をのがれようとはしないだろうと(考えて)。” なお仏訳では、*no s'en voldra estraire* を *ne refuseroit pas de* と訳している。すなわち、この *voler* の未来形は、いわば、fr. mod. の条件法現在に訳出されていると考えることができる。そしてこの場合は過去における未来を表わしている。かような用法は、fr. mod. の用法とは多少のずれがあることは明らかであるが、*voler* の未来の一用法として、それほど理解し難いものではない。

ii) “Saint-Antonin の城市から Casseneuil へと彼は行ってしまおうとした。” 仏訳には *decida* と単純過去に訳出されている。*voler* に *decider* の訳語が宛てられていることも一つの問題であるが、何よりも未来が単純過去に訳されていることに少なからず奇異の感が抱かれる。

iii) “いずれ France の上士団がそれを着服しようとするであろうから。” この例は、そのまま fr. の *vouloir* の未来形で訳されており何の問題もない。

iv) “彼らは水(を求める策)をあなた方から奪おうとするだろう。” これも *chercheront* と未来形に訳されており、大きい問題はない。

v) “vicomte が、彼が欲するであろう所の人々の第12番目として(すなわち、ほか11名を従えて)落ちて行くことを、みなは容認するであろう。” ここは *que il voldra* を *de son choix* と形容詞句に意識してあるが、この用法にも何ら解り難い点はない。

vi) “この人に一同そろって頼もうとした。” ここでは再び *voldron pregar* が *pria* と単純過去に訳されている。

vii) “(市民たちに)和議を講ずる意志はないであろうかと。” この *voldran* は *était disposé à* と半過去に訳されているが、i) の例とともに過去における未来を表わしていると理解することができよう。

viii) “教皇が裁きを付け給うであろうだけのことをいしましょう。” ここは *tant com voldra jutger* を *la décision* と一つの名詞に圧縮して訳してある。

ix) “そこへ行きたいと思っているのだと言う。” 与えられた仏訳は *desiraient* となっていて、過去における現在を表わす意味での半過去に訳されている。いささか気がかりな用法である。

x) “これからしようと考えている所の長大な(旅)路のために。” この箇所は *que cu9 que voldra far* を *qu'il entendait faire* と訳している。

1.3 以上わずかの 10 例では、結論を導びくに充分でないことは明らかであるが、少なくとも問題がどこにあるかの見通しぐらいは付くように思われる。

1.3.1 一つの問題は、意味論上の問題ともいへば、*voler* を仏訳した場合の訳語として、*desirer*, *chercher*, *entendre*, *être disposé à*, *decider* が宛てられることがあることである。もっとも翻訳をする場合の訳者の意識というものを考えてみると——文脈を離れての単語 *voler* あるいは抽象概念としての単語 *voler* は、意味空間のある拡がりを持った領域をおおっている。あるいは別の言葉で言えば、多くのまたは無数の *nuance* を含みとして持つところの潜勢態である。その様々の、可能性としての意味を持った *voler* なら *voler* が、現実のある文脈という一つの場において使用せられると、その場において、その *voler* は、多くの可能性、多くの *nuance* のうちのただ一つに固定され、釘付けされて、その場に当てはまる限定せられた一つの意味を取ることになる。翻訳者の頭には、その、文脈において特殊化せられたその特定の意味を一層取り立てて、一層明瞭に訳出しようという意識の働くことがあるものだ。そこで一つの *voler* が、その時々々の文脈に応じて、あるいは *chercher*、あるいは *désirer* と訳されることになる。何でもない簡単なことに、ことさらに複雑でややこしい説明を加えたようであるが、当面の問題の *voler* に立ち帰って——*désirer*, *chercher* のような訳語が *voler* に宛てられるまでは理解し難いことではない。しかし、fr. の *vouloir* が *décider* “決心する” の意味に用いられることがあるか。すなわちこの点で fr. *vouloir* と prov. *voler* との間には少なくとも何らかの程度の意味のずれがあるのではないか。もっともこの場合の訳語 *décider* が、“……することにする、……することに決める” ほどの軽い意味で用いられているのならあまり難しく考える必要もない。

ともあれここに書き止めて筆者自身の宿題とし、併せて同時にイタリア語等の他方言ではどのような状況であるかをお質ねしてみる。

1.3.2 いま一つの、おそらく一層重大な問題は、ii) と vi) との、訳文では単純過去に訳されている *voler* の未来の用法である。筆者は、この種の用法を、いわば *futur historique* とも称すべきものと解してよいのではないかと考えるがいかがであろうかこの解釈の傍証として役立つ可能性のありそうなのが、ix) の用例である。ここは主文の動詞が *dizo* を直説法現在におかれているのであるから、この *voldran* が未来形でなしに、現在形を取って *volon* の形で出ていたならば何の問題もないところである。

そこで仮に、prov. 語では、本来ならば——あるいは fr. mod. でならば——現在形を用いるべき場合に、未来形を用いる傾向があるものとするならば、*présent historique* の場合にも代りに *futur* を用いることがそれほど理解し難いことではなくなる。

さて仮に prov. にそのような傾向が仮にあったものとして、それは単に動詞 *voler* のみに限られる現象か。それともどんな動詞にも共通する現象か。

ともあれ、prov. の直説法未来の用法について調べてみるのが、筆者の次の課題となるが、同時にここに記して、ロマンス語の他の方言に似たような現象、参考になるような現象はないかにつき、御教示を仰ぐよすがとしたい。

(大阪市立大学 助教授)